

# 小田原教育

第105号

平成18年9月15日



## ミツバアケビ

北海道から九州、中国に分布するツル植物。小葉が5枚あるものを「アケビ」、3枚のものを「ミツバアケビ」、両者の雑種を「ゴヨウアケビ」という。荒れた場所や乾燥した場所にも生育し、マツ枯れ跡地などにも良く見られる。

果実が熟すと割れて中の果肉が見えるようになり、「開け実」から「アケビ」と名づけられた。

## 目次

### 巻頭言

「弱いつてことは、わるいことではないよね、……」

小田原市教育研究所長 ..... 2

### 1 小さなころみ

① 「小学校英語活動の試み」

小学校英語活動に関する研究員 ..... 3

② 「望ましい学級経営の追究をめざして」

学級経営に関する研究員 ..... 4

③ 「不登校生徒を対象にした学習支援のあり方」

不登校生徒を対象とした学習支援のあり方に関する研究員 ..... 5

### 2 学びの架け橋

① 「子どもの育ちと造形教育」

図工・美術 プロジェクト研修研究員 ..... 6

② 「小・中学校の系統を考えた総合的な学習の時間」

総合的な学習の時間 プロジェクト研修研究員 ..... 7

③ 「豊かな心を育む道德の時間を目指して」

道德 プロジェクト研修研究員 ..... 8

### 3 ある教室から

「命ということ、家族ということ」

学校教育課指導主事 ..... 9

### 4 研究所だより

教育教研究所指導主事 ..... 10

弱ってことは、わるいことではないよね、……

## 登校力を

小田原市教育研究所所長

「喫緊の課題」それは不登校児童生徒の解消です。17年度小田原市の30日以上の不登校者数（出現率％）は、小学校45名（0.41％）・中学校230名（4.37％）で、同年全国出現率が小学校0.32％・中学校2.76％ですので、全国に比べ小学校が0.09％の増、中学校は1.61％の増でした。つまり、中学校では85名減らさないと全国レベルまで下がらないこととなります。本年度は、6月現在で小学校21名・中学校98名と昨年の同月を大幅に越えてしまい憂慮すべき事態となっています。月7日以上で長欠児童・生徒ですと、この年度始め4・5・6月で、小学校42名・中学校156名となり、特に小学校が昨年に比べ増え始めています。また、この長欠者へのかかわりは、教育相談指導学級・教育相談・他機関を除いて、学校対応が約70％となっています。病気欠席なのか不登校なのかを判断することは難しく、不登校児童生徒だけに目を向けるのではなく、欠席者全体に目を向け、その対応を考えていく必要もあります。

登校しない状態になる背景には、サボリ・学校恐怖症・親子のゆがみ・いじめ・学業不振・無気力と広範囲になっています。また、家庭・学校・地域・本人のさまざまな要因が複雑にからみあっている場合もあります。小田原市の場合、欠席の主な理由を7つ〔A1：心因性の病気、発達障害による不適応。A2：引きこもり傾向。A3：遊び・非行による怠学。A4：その他本人に起因するもの。B：学校生活での対人関係に起因するもの。C：学習に起因するもの。D：家庭環境に起因するもの。〕に分けています。6月現在で欠席の一番多い理由は、小学校が

「家庭環境に起因するもの」、中学校が「その他本人に起因するもの」です。不登校児童生徒の理由の特定には困難をきたすものですが、それだけに児童生徒理解への努力をより一層強める必要があります。また、学校全体のシステムをつねに見直すことを期待しています。

「ブンナよ、木からおりてこい（水上勉著）」の中で、「弱ってことはわるいことではないよね、かなしいことにちがいないけど、弱いことはわるいことではないよね、……」と、どんなことをしても生きていたいという雀の哀訴の声。人間にも自分ではどうにもならないことがあります。ましてや保護が必要な子どもです。雀の声だけでなく、百舌・鼠・へび・牛がえる・つぐみ・土がえる、そして鳶の声をしっかりとらえて、きょう1日を生きられるよろこびをうたうブンナのように、あたたかさをもった身近な人間の絆で、個々の子どもの状況を早期に見極めて登校刺激等、適切な働きかけを行い、登校力を湧き出すことができるようにしたいものです。

本年度、学校教育課と教育研究所の機構改革により、より緊密な連携を取ることになりました。不登校対策委員会・児童生徒指導研修会・SSSの配置や相談員による学校訪問と家庭訪問など指導・協力体制を整えています。また、研究所の7つある共同研究事業のひとつに「不登校生徒を対象にした学習支援のあり方」の研究が始まりました。不登校生徒に対して学習面でどのように支援していくかを、調査研究し実際に検証しながら、小田原市として可能な支援のあり方を考え提言していくつもりです。



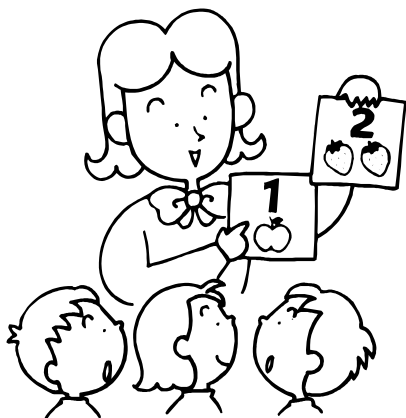
## 小学校英語活動の試み

小学校英語活動に関する研究員

本年度、小学校英語活動の研究が新しく立ち上がり、4人の小学校教員で研究を進めています。

本研究グループは、児童が英語に親しみ、楽しく英語体験を積み上げるためには、どのような活動を展開すれば良いのか、という視点で、補助的な資料の作成をめざしています。

取り組みやすい実践への手がかりなどを示しつつ、既に各校で進められている英語活動の改善に役立てばと、欲張った目標を掲げて活動しています。



内容としては、年間の指導計画の例として4つのテーマ(カテゴリー)を示し、そのテーマごとに児童の英語経験(発達段階)を踏まえ、どのような英語活動が展開できるかといった手がかりとなるような例を挙げ、さらに、その例示をホップ、ステップ、ジャンプの3つの段階で示す予定です。

例えば、自分や相手のことを知って、仲

良くなるためには、「あいさつ」が必要です。ホップの段階では、Good morning. Hello. と言いますが、ステップの段階では、Hello, my name is~ . Hello, I'm~ . と自分の名前が入り、ジャンプになると Hello, this is~ . His/Her name is~ . と自分以外も紹介する形になっています。

次に、そのテーマや段階に沿って、学級担任ひとりが行う授業、日本人英会話講師と学級担任、あるいはALTと行うT・T授業のティーチング・プランを作成することを試んでいます。

また、授業で使える歌やそのCD、身体表現(ダンスなどの活動)集、絵本、絵カード集、VTR等、コピーをして何度も使える教材や視聴覚的教材などをできるだけ多く紹介できるようにしたいと考えています。

さらに、中学校では、よく使われるクラスルームイングリッシュ(授業中の指導に使用される)だけでなく、職員室・廊下から教室に至るまでの英語世界の雰囲気を作り出す便利な英語集を、巻末に付ける予定です。

市内の小学校にける英語活動の状況は様々です。そこで、先進的に研究を進めている学校のノウハウを取り入れつつ、しかし、どの学校でも取り組む際に多少の参考になる資料となるよう努めて行こうと思います。



## 望ましい学級経営の追究をめざして

学級経営に関する研究員

### 1 なぜ「今」なのか…

昭和60年3月、小田原市教育研究所は「中学校 望ましい学級経営の研究」という一冊の本を各学校へ配布しました。当時の学校の状況を詳細に捉え、学校生活における様々な場면을想定して、それぞれの場面に即した指導の方法を具体的に紹介したもので、当時としてはたいへん画期的なものでした。しかし、近年、学校の状況は大きく変化してきており、いじめや不登校、授業妨害や学級崩壊などは社会問題として取りざたされています。また生徒自身に関して言えば、耐性の弱さ、自己中心性の強さ、自己肯定感の低さなど、個々の抱える問題は非常に多様なものとなってきています。このような、学校や生徒にかかわる問題の増加、及び多様化が再び本研究に着手するきっかけとなりました。

### 2 教師に求められること

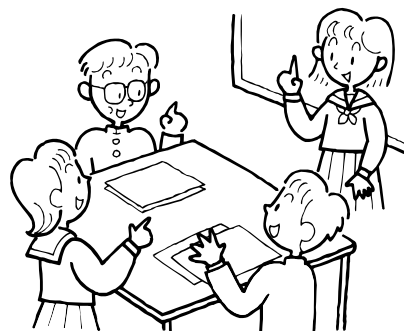
今や社会問題ともなっている「いじめ」や「不登校」、さらには、中学生だけの問題としてとどめることのできない「耐性の弱さ」や「自己中心性の強さ」。これら、現代社会の抱える課題を、単に個の問題として片付けてしまってよいのでしょうか。学校という小さな社会の中でさえ、生徒一人ひとりがどのような集団に所属するかが、その生徒の後の生き方に大いに影響を及ぼすと思われます。従って、私たち教師が、学校における基本的な集団である学級というものを、どう経営するかが重要であると言えます。

現代社会において生徒を取り巻く環境は多様化しており、それに伴って生徒一人ひ

とりのものの見方や考え方も多様化していく一方です。私たち教師は、「教室」という社会の縮図の中で互いに関わりながら生活している多様な個に対して、それぞれに適した指導支援を心がけていかなければならないと考えます。

### 3 研究を進めるにあたって

本研究を進めるにあたって、まず、それぞれの学校、学級の状況を正確に把握することが必要です。毎日、学校現場で実際に生徒たちと接し、悩みながらも学級経営に携わっている先生方が、その解決のために何を必要としているのかという率直な意見を、アンケート調査によって収集していく予定です。その結果を基に、本研究が様々な問題に直面している先生方の学級経営の一助となることを願い、先生方のニーズを考慮した「現代的課題に合った望ましい学級経営」を追究していきたいと考えています。





## 不登校生徒を対象にした学習支援のあり方

不登校生徒を対象にした学習支援のあり方に関する研究員

### ①はじめに

2005年度に神奈川県内の公立中学校で「不登校」を理由に30日以上欠席した生徒は7399人と過去最多になったという報道がありました。

小田原市の中学校ではこれまでも、家庭訪問や保健室での対応、スタディ・サポート・スタッフ等を利用した別室登校の取り組み、スクールカウンセラーの配置などの校内での働きかけの他、訪問相談、相談指導学級への通級など外部機関との連携もすすめてきましたが、簡単には問題が解決していないのが現状です。別室登校ができたり外部機関との関わりがもてたりする生徒についてはまだいいのですが、どこにもつながりがもてずに、担任だけが抱えて、改善策が見つけれずにいるケースもかなりあります。

中学校が小学校と大きく違う点に、卒業後の進路を決めなければならないということがあります。ほとんどの生徒が高校進学を希望するのですが、それには進学するのに見合った学力をつけなければなりません。不登校生徒のなかには、自分が登校しないことでの学習の遅れを気にしているものが多くいると思われます。それがまた学校への復帰や卒業後の進路選択の妨げになっていることは十分に考えられます。

そんな生徒達にどんな学習支援ができるだろうか、というのが今回私たちに与えられたテーマです。

### ②各地での取り組み

文部科学省ではすでに、「不登校児童生徒を対象とした学校の設置に係る教育課程の弾力化事業」、「IT等の活用による不

登校児童生徒の学習機会拡大事業」として、各地で様々な取り組みをしています。不登校児童生徒のための市立小中一貫校の設立、不登校児童生徒のための学習の場としての教室を設置し、学年の枠を越えた習熟度別学習を行う等。また、家から出ることが困難な生徒に対しては、電子メールやファックスを利用した学習活動、オンライン教育ソフトを使った学習活動を行っているところもあります。この場合訪問指導との連携で、一定の時間以上の自主学習について出席扱いにしているところもあるようです。



### ③今後の取り組み

私たちは小田原市の不登校生徒の現状を把握するために、外部機関との関わりや学習支援の実態についてアンケート調査を行いました。（詳しい分析はまだこれからですが）それによると、7月現在、学校で教科の授業を受けることが「ほとんどない」「ない」生徒のうち、何らかの形で学習する機会も「ない」ものは、不登校全体の21%（137人中29名）いることがわかりました。

今後、県内の他の地域の取り組みを調査・研究し、小田原市ではどのようなことができるかを検討していきたいと考えています。



## 子どもの育ちと造形教育

プロジェクト研修研究員（図工・美術）

### <研究の概要>

子どもたちは、自分の思いや願いを表現しながら、自分を発見し、よりよい自分を築いていく。私たち教師は、子どもたちが自己実現できる喜びを味わえるように、子どもたちに対するよりよいかかわり方を考え、支援をしていかなければならない。そのためにも、子どもたちそれぞれの発達段階に応じた指導のタイミングを考え、基礎・基本を定着させながら楽しい造形活動の時間となるような計画を立てていきたい。また、人格形成的側面から心の教育としての図工・美術のあり方も追求していきたいと考えている。

### <研究内容>

1年目は、この研究を始めるにあたって、小・中学校の子どもたちについて、どんな様子か実態を話し合った。その中で、子どもたちは、頭の中にイメージがあっても、実際に表現する段階では、自分の思うように実現できないという実態があり、図工・美術嫌いになってしまうケースがあるということが分かってきた。そこで、教師がどのように支援をすれば子どもたちが楽しく造形活動に取り組むことができるかを研究していきたいと考えた。

研究において「小・中一貫して取り組めることは何か」を話し合ったときに、子どもたちに支援する前に、まず、私たち教師がしっかりと道具についての基礎・基本を知っておくことが大切であるということになった。そこで、私たち教師からもう一度、基礎・基本の確認を行うことができるように、1年目としてまずは、はさみや接着剤など造形活動に欠かせない道具の種類・使

い方・注意などをまとめた「先生のための便利なおどうぐばこ」という小冊子を作成した。

2年目は、作品づくりの際に、教師をはじめ、周りの友だちから言われて嬉しかった言葉やいやだった言葉についてのアンケートを行った。その結果、私たち教師が子どもたちの作品を見たとき、具体的な表現で誉めてあげることができれば、図工が好きな子どもが増えていくということが分かった。しかし逆に、良かれと思って言った言葉でも、子どもたちに自信を失わせてしまうことがあることも分かった。そこで、授業実践を行うことを通して鑑賞を中心とした授業づくりのあり方について考え、教師として反省すべき点を振り返りながら、よりよい支援をしていくための手だてを研究していくことにした。

2年間の研究を通して、「教師からの支援や子どもどうしのかかわりあいの大切さ」を改めて実感した。そこで、3年目の研究は、9年間の「子どもの育ち」を念頭に置いて、小・中学校のつながりも考えながら授業実践を行う予定である。そして、子どもたち一人ひとりが生き生きと造形活動に取り組むことができる図工・美術を目標に研究を進め、3年間のまとめをしていきたいと考えている。





## 小・中学校の系統を考えた「総合的な学習の時間」

プロジェクト研修研究員（総合的な学習の時間）

小学校、中学校2名ずつ計4名でスタートしたプロジェクト研修研究会、総合的な学習の時間の部会も3年目となった。

2002年度より導入された「総合的な学習の時間」は、学力低下問題から、その時間の削減が話題となっているが、「総合的な学習の時間」は「生きる力」をキーワードとした新しい教育課程の中で中核に位置づけられたものである。

この部会をどのように進めていくのか手探り状態のスタートだったが、1年目は「総合的な学習の時間の現状と課題」をテーマに、校種別の現状を明らかにすることから始めた。

「総合的な学習の時間」の学習活動は学校ごとに大きく異なる。そこで研究員の所属する学校の授業を相互に参観し、先進校への見学を行った。また、各学校での聞き取りやアンケートを実施し、教師の受け止め方について集約した。そこから次の4項目が浮かび上がってきた。

- 「①カリキュラム作りをどうするのか」
- 「②総合的な学習の時間のよさはある」
- 「③教師の姿勢」「④教科との関連」

この4項目から、「児童生徒と教師の総合に対する温度差を解消すること」、「指導体制を工夫していくこと」を課題として次年度につなげた。

2年目は、これらの課題の解決方法として、次の2点に取り組んだ。

1つめは、子ども達の身についている力・総合的な学習の時間で生かしたい力を見極めるために、小・中学校の学習経験や学習技能の系統を把握すること。2つめは小・中学校で共通テーマを設定し、単元構成を検討することである。



各教科の学習内容（小3～中3）との関連については、国語科の学習スキルを「課題設定」「情報収集」「整理・まとめ」「発表」に分類し、単元名や内容を記入した資料を作った。社会科、理科、技術・家庭科については、関連する学習内容を収集した。

小・中共通テーマでの指導計画と実践では「防災」をテーマとし、小学校で授業研究を、中学校ではプランニングを行った。

そして3年目。今年度は各教科の学習内容との関連をいかに、児童生徒自らが「育てたい力」を意識できる授業実践をめざしている。千代中、下府中小での授業参観をへて、報徳小での公開授業を予定している。また、時間をかけて作成した各教科との関連をまとめた資料については、小・中学校教育研究会総合的な学習の時間の部会で紹介させていただこうと考えている。

この3年間、この部会はとても楽しく充実していた。部会の時間が長くなることも多かったが、「総合的な学習の時間のよさを大切にしよう」「児童生徒とともに楽しく学ぼう」というスタンスで、研究が気持ち良く進められたからだ。毎回3名の方からは仕事を楽しむ明日への力をいただいた。

11月の公開授業に向け、研究員の小中連携の力で、より良い研究をめざしたい。





## 豊かな心を育む道德の時間を目指して

プロジェクト研修研究員(道德)

私たちは、公開授業を通して、また小中学校での指導の実際を情報交換しながら、お互いに研修し合い、課題を探っていきました。

年間35時間の授業をただ一つの指導過程で行うとマンネリ化に陥ってしまいます。そこで子どもの興味、関心を高め、新鮮な気持ちで道德の時間を迎えるためには、資料の工夫、多様な指導過程を取り入れる必要があると考えました。

### 1 資料の工夫

#### ①幅広く資料を収集する

文科省、県道研作成資料、郷土資料、民間の副読本など、普段から多様な素材に目を向けていく必要がある。

#### ②実践から

- ・紙芝居や絵本、1枚の絵などから資料を選ぶ（ボランティアの方に読み聞かせをお願いした実践）
- ・子どもと共に考えたい問題やテーマなどを普段から収集する（アサーション・トレーニングの実践）
- ・新聞記事やニュースなどをもとに自作
- ・ゲストティーチャーの話を資料の代わりにする



### 2 多様な指導過程

#### ①基本指導過程

導入ではねらいを自分の問題として受け止めさせ、展開部の話し合いでは自分と友達の価値観の比較によって自

己の価値意識を自覚し、考えが多様にあることを知る。内省の時間は資料で学んだことをいかして自分の生活に目を向け、よりよく生きようとすることをねらいとする。終末は道德の高まりを助長し、実践してみようとする意欲をもたせることを目指す。

#### ②人材を活用した指導過程

展開や終末で外部講師にお話ししていただき、そこからその人の考え方や生き方を感じ取り、自分の内省につなげる。人材を活用した授業は、副読本を使った授業とは違う迫力や言葉の重さ、真剣に生きている人の姿などを直に感じ取ることができ、子どもたちの道德的価値観を大きく揺さぶることができる。

#### ③今日的な課題を扱った指導過程

主人公の行為や考え方を子どもに批判させ、互いの意見を交わし合うことでねらいとする道德的価値について考えさせる。資料を作成するにあたっては、時事性や適時性があるか、一つの価値に対して異なる視点が存在するか、子どもたちの実態に合っているかなどを検討する必要がある。

#### ④体験を取り入れた指導過程

展開の中に体験活動を取り入れる時間を設定すれば、主人公の気持ちや考えを肌で感じることができ、体験なしでは感じ得なかった新たな気づきが生まれ、それによって子どもたちの考えが深まる。

しかし、資料を話し合っておしまい、講師の話を聞いておしまい、体験をさせておしまいでは、子どもたちの道德的実践力を高めることはできません。それらを通して自己を内省することが「道德の時間」の大切な部分であると思われます。





## 命ということ、家族ということ

～ひびき合う瞬間を感じた道徳の授業から～

学校教育課 指導主事

……「エエ授業やったなア」と自分で納得できるというものは、その局面をとらえて言うならば、クラスがひとつの人間になってしまったと実感できるときと言えるかもしれない。身も心も全く違った子どもたちと一人の教師が、あるひとつのところに達して響き合ってしまうのである。……中略……子どもたちを前に、この日この時間、ぼくの全身は鳥ハダにおそわれてしまった。

(灰谷健次郎著「優しさとしての教育」より)

主題名「命ということ、家族ということ」の5年生の道徳の時間、主人公の妻は、肺癌でこの世を去りました。小学校1年生の娘を残して……。この資料を読み終わって、感想を発表する場面で、その瞬間が訪れました。

「お父さんも娘も悲しかっただろう」「余命を宣告された妻が、もっとつらかっただろう」「もっと早く病院へ連れて行けば良かったのに」と、一般的な感想が続く。I先生は、意図的にTさんを指名。ある意味、この時間を左右させる勝負に出た。指名されたTさんは、淡々と話し始めるが、途中で言葉が詰まり、「ぼくもお父さんが亡くなって……」ぐっと堪えていた思いが……。堰を切ったように涙が溢れ出てくる。それでも、話し続けようとするTさん。これを受けて、すすり泣き始める周囲の子どもたち。それでも道徳の時間は続く。涙ながらに挙手をし、話し始める他の子どもたち。

「わたしも、おばあちゃんを亡くして……」  
「わたしは、死んだ人はいないけれど……」  
経験の有無に関係なく、普段、『死』への悲しみをあまり意識したことのない子どもたちが、つい最近『死』に直面したTさんの悲しみを通して、『死』という学びの対象を、

クラス全体が共有し、響き合った瞬間であった。

さらに授業は進む。すすり泣き続ける子どもたち。このままでは『死』＝『悲しい』だけで授業が終わってしまう。子どもたちに、「限りある命だからこそ、よりよく生きよう」ということまで考えさせていきたいI先生。しかし、まだ、すすり泣く子どもたち。

一閃、I先生の声にならないような声で、語調は強いが子どもたちを励ますような言葉が飛んだ。「おまえたち、だから、どうするんだ！」一瞬にして空気が変わった。子どもの思考の切り替えに成功したのだ。涙を流しながらも、「おばあちゃんとの思い出を大切に、おばあちゃんの方まで生きていこうと思う」「家族に支えられて生きている。精一杯生きていこう」というように、前向きに生きていこうという視点での発言に切り替わった。

笑顔で楽しい授業、活発に話し合う授業が求められています。時には、悲しいことを話題とし、涙ながらにじっくり考える授業も、子どもたちの育ちには大切な経験ではないでしょうか。友だちの悲しみを共有し、クラスがひとつの人間になったような感覚。身も心も全く違った子どもたちと一人の教師が、あるひとつのところに達して響き合った瞬間でした。





# 研究所だより



教育研究所指導主事

## ◆ 研究所より ◆

今年度から、研究所は、指導主事二人体制になりました。どうぞよろしくお願い致します。

学校教育課との機構改革によって、研究所の仕事も少し変わりました。

研究は今まで通りですが、要覧でお知らせしたように、学校教育課で行っていた研修を、数多く手がけることになりました。提出先が学校教育課でなく、研究所に変更になりますが、1年目で戸惑うこともあると思います。遠慮なく、お問い合わせ下さい。

## 新着図書のお知らせ

今年度新たに購入した図書です。共同研究を進めている内容が中心ですが、他の内容の図書購入も予定しています。

2週間の貸し出しを原則としています。是非ご利用下さい。

## 不登校対策に関して

「教師のための不登校サポートマニュアル」  
小林正幸 明治図書

「上手な登校刺激の与え方」  
小林美代子 ほんの森出版

「続・上手な登校刺激の与え方」  
小林美代子 ほんの森出版

## 小学校英語活動に関して

「うたって遊ぼう小学生の英語の歌」  
永井淳子 教育技術 MOOK

「うたって遊ぼう小学生の英語の歌(2)」  
久空百合 教育技術 MOOK

「小学生の英会話活動－英語が好きになる」  
久空百合 教育技術 MOOK

「小学校英語活動 365日の授業細案」  
熊本大学教育学部附属小学校

「子ども英語指導ハンドブック 英語ゲーム92」  
ゴードン・ルイス

## 学級経営に関して

「めっちゃ明るい教室経営の法則」  
向山洋一、染谷幸二 明治図書

「中学の学級経営～黄金のスタートを切る3日間のネタ110」  
明治図書

「学級経営と授業で使えるカウンセリング」  
諸富祥彦 ぎょうせい

「中学1年の学級経営～365日の仕事術と活動ネタ」  
田上善浩 明治図書

「中学2年の学級経営～365日の仕事術と活動ネタ」  
田上善浩 明治図書

「中学3年の学級経営～365日の仕事術と活動ネタ」  
田上善浩 明治図書

「中学校若手教師の学級経営テキスト」  
渡部邦雄 明治図書

## 教育支援電話をご存じですか

「研究授業なんだけれど・・・」  
「研究会の講師を捜しているけど・・・」  
「先輩や同僚には聞きにくくて・・・」  
相談に応じています。お気軽にどうぞ。

TEL : 33-1732

小田原教育 第105号

発行日 平成18年9月15日(金)

発行所 小田原市教育研究所

発行者 所長 小宮 郁夫

〒250-8555 小田原市荻窪 300

電話 33-1730

研究所ホームページアドレス

<http://www.ed.city.odawara.kanagawa.jp/>

[kyouiku\\_ken/index.html](http://www.ed.city.odawara.kanagawa.jp/kyouiku_ken/index.html)